

# 憲 法

木下昌彦・片桐直人・高田倫子  
堀口悟郎・吉川智志

## 1 はじめに

今期も、我々5名で担当する（担当箇所は個別に明示している）。本欄では取り上げるのは、本誌の昨年10月号から本年9月号の文献月報に掲載された著書・論文である（公刊時期等の関係で対象期間外のものであっても、筆者らの判断によりレビューを行ったものがある）。本欄は、基本的に従来の方針を引き継ぎ、比較的若い世代の研究者による業績に比重を置きつつ、その概要の紹介を行うとともに、代表的な研究業績のリストアップを行った。原則、外国憲法に特化したものは取り上げず（ただし、特に若手研究者の場合には比較法研究が中心となるため例外もある）、判例評釈・翻訳・書評・一般向けの書籍や雑誌記事なども取り上げない。

## 2 論文集・雑誌連載・雑誌特集・教科書

今期は、学会活動の成果として、憲法理論研究会編『市民社会の現在と憲法（憲法理論叢書29）』（敬文堂、以下、憲理研）、全国憲法研究会編『憲法問題33』（日本評論社、以下、憲法問題）、比較憲法学会『比較憲法学研究33』（以下、比較憲法学研究）、憲法学会『憲法研究53』などが刊行された。また、憲法学会六十周年記念論文集編集委員会編『日本憲法学の理念と展望』（成文堂、以下、理念と展望）も発刊されている。概説書としては、倉持孝司『比較から読み解く日本国憲法』（法律文化社）、沼田智則『入門憲法講義』（晃洋書房）、東裕＝杉山幸一『日本国憲法』（弘文堂）などがある。憲法訴訟に携わってきた複数の実務家がそれぞれの経験を記した吉原秀編『代理人たちの憲法訴

訟』（弘文堂）も出版されている。

今期は、大石眞による集大成的著作が相次いで出版されている。憲法の体系書として大石眞『憲法概説Ⅰ・Ⅱ』（有斐閣）が、憲法上の制度に関する大石の集大成として大石眞『憲法制度の形成』（信山社）が、そして、大石への古稀記念論文集として、曾我部真裕ほか編『憲法秩序の新構想』（三省堂、以下、大石古稀）が発刊されている。論文集に関しては、これまで国際的な学術雑誌等に多くの論稿を投稿してきた長谷部恭男が、それらの英語論文をもとに全編英語でまとめたYasuo Hasebe, *Towards a Normal Constitutional State* (Waseda University Press) も注目される。

雑誌特集等については、今期も、辻村みよ子責任編集『憲法研究』（信山社、以下、「憲法研究」）9号と10号が刊行された。9号では「特集／学問・教育の自由と国家の役割」が生まれ（〈第1部〉学問の自由と国家、〈第2部〉憲法教育と教育の自由、〈第3部〉教育を受ける権利と「主権者教育」の課題）、10号では創刊第10号特別企画として、「特集／憲法判例理論（Ⅰ）人権」が組まれている。このほか、「特集／憲法の学習を身近に感じる」（法教501）、「特集／憲法訴訟の反対意見を読み解く」（法セ808）、「特集／社会の変容と憲法」（論ジュリ38）などがある。

雑誌連載については、今期から駒村圭吾ほか「Law of IoB(1)～(7)」（法セ807～813）、宍戸常寿「判例講座・憲法人権(1)～(4)」（警察学論集75.4～75.8）、柴田憲司ほか「憲法事例分析の技法(1)～(6)」（法教499～503）、「統治構造において司法権が果たすべき役割第3部(1)～(4)」（判時2506=2507～2520）などの連載が開始された。今期継続中のものとして、建石真公子「生命への介入、その法的